

# 現代の神話「荒地」の持つ意味

An Interpretation of a Modern Myth, *The Waste Land*

津 田 早 苗

## 序 論

T. S. Eliot の詩「荒地」は、彼の現代社会への批判であるということが一般に言われている。しかし、現代社会の描写をするのに何故彼が多くの過去の文学作品、神話、伝説等から引用しなければならなかったかを理解しなければ「荒地」を正當に評価・鑑賞することにはならない。現在に至るまでに、数多くの解釈がこの詩についてなされ、他の文学からの借用という彼の技法に対する評価も批評家によって異っている。この小論文においては、彼の用いた文学的・詩的技巧のうちで、この他の文学、又は、神話・伝説の引用の問題をとりあげ、その「荒地」における効果を分析し、彼の意図を明らかにすることを試みる。神話の解釈については、第一章において、ユングの精神分析の概念を用いて、詩全体の枠組との関連性を述べ、第二章においては、詩の各部分の分析を行う。

## 第一章 ユングの神話解釈と「荒地」

George Williamson は、彼の批評の中で、T. S. Eliot の「荒地」は、精神的なものを失った現代社会への批判であると言い、神話に関しても、次のように言及している。

And death is the ultimate meaning of the waste land for people to whom its explanation is only a myth, for whom sex is destructive rather than creative, and in whom the will to believe is frustrated by the fear of life.<sup>1</sup>

Williamson は、荒地の住民の行きつくところは、死であると解釈している。何故ならば、彼等の人生の意味は、神話のように謎につつまれ、非現実的であるし、彼等は、本来の生命の再生産の手段としての性ではなく快楽の手段としての性を追い求める程墮落し、真の意味で生きるということの苦痛を避けているので、まるで生きた屍のような毎日を送っているのである。

1 George Williamson, *A Reader's Guide to T. S. Eliot: A Poem-By-Poem Analysis* (London, 1955), p. 129.

Williamson は、神話はとらえどころのない過去の残骸であり、現代の人々には理解出来ないもの、現代の社会において積極的な意味を持ちえなくなったものであるとみなしているように思われる。

これに対し、Elizabeth Drew は、精神分析におけるユングの考えを「荒地」に用いられている神話の解釈に応用し、神話がこの詩の中でより肯定的な役割をはたしているとしている。彼女は、T. S. Eliot が、彼の「ユリシーズ、秩序と神話」において、James Joyce が「ユリシーズ」の中で、ダブリンの町と神話「ユリシーズ」を平行して用いた技巧を高く評価している点に言及し、更に、T. S. Eliot は、Joyce を賞讃すると同時に、自己の作品の「荒地」における神話の役割についても述べているのではないかということ指摘している。Eliot は、この手法によって、混沌とした現代の世界に秩序が与えられるとしているのだが、Elizabeth Drew は、彼が評価した以上にこの神話のはたす役割を重視している<sup>1</sup>。

そして更に、彼女は、ユングの collective unconscious の概念によって、神話の積極的意味を明らかにしようとしている。collective unconscious というのは、ユングによれば、人間の識閾下に継承された人類の過去の経験の集積であり、神話や、未開人の儀式、人々の夢の中に、変形された形で出現する人類の原型的なイメージである。故に、ユングにとっては、神話は、現実からの逃避や、単なる想像の世界の描写ではなく、人間の根源的な生命の源である。仮に、Eliot が、ユングの考えたような意味で神話を取りあげたのだと考えれば、彼の詩における引用の謎の一部が解けるのではなからうか。

Eliot は、「荒地」の中に、洋の東西を問わず過去の文学作品、伝説、神話を用いているが、詩全体の枠組の役割をはたしているのは、聖杯の伝説である。古代から人類は、様々の形で、穀物の実りと、子孫の繁栄を願う儀式、行事等を行ってきたが、この伝説も、漁夫王の不能を回復する物語である。

聖杯の伝説とならんでこの詩の中で重要な役割をはたしているのは、Tiresias である。彼は、神話の世界に属し、そして荒地をながめるといふ作品にある視点を与える役割をしているのだが、Eliot も、作註で、“the most important personage in the poem, uniting all the rest”<sup>2</sup> とその重要性を強調している。彼は、更に Tiresias が男性と女性の特徴を兼ね備えていることを、Ovid からの引用をひいて神話的説明をしている。これに関しては、Genevieve W. Foster は、ユング的な説明をしている。

The psyche is, in a sense, bi-sexual, the values of the other sex is always appearing in the unconscious. See the chapter on “Anima and Animus” in Jung’s *Two Essays* (Part II, Chapter ii). This fact

1 Elizabeth Drew, *T. S. Eliot: The Design of His Poetry* (New York, 1949), pp. 1-2.

2 T. S. Eliot, *Collected Poems: 1909-1962* (London, 1963), p. 82. 以下、この本からの引用は、引用文のうしろに、本文の中に頁を記す。

seems to account, incidentally, for the bi-sexuality of Tiresias...<sup>1</sup>

ユングは、男性の識閾下には、相補的な女性的要素アニマが、女性には、アニマスが存在すると主張している。「荒地」における Tiresias は、実際の詩の登場人物ではないので、男性と女性の原型であるアニマスとアニマをあらわしていると考えられることも可能である。

I Tiresias, though blind, throbbing between two lives, Old man  
with wrinkled female breasts, can see. (p. 71)

Tiresias は、上記のような性質を持つ一方、年老いた予言者の役割もはたしている。そして、予言者であるという点で、もう一つのユングの提唱する人間の原型である老賢者に該当するとも考えられる。識閾下において、この原型にとらわれた人間は、自分が予言者であるとか聖人であるという考えにとらわれる。このような人間は、誇大妄想に陥る危険がある、と同時に、彼が人類の中で予言者の役割をはたす可能性もある。故に、この詩における Tiresias は、荒地の住民に対して、予言者としての大きな力を駆使出来る立場にあると解釈出来る。以上の解釈は、Eliot 自身の註を比較参照する時、あまり的はずれではないように思われる。次に、詩の展開に従って、各部分の内容と神話の関連性をたどってみたい。

## 第二章 「荒地」と神話との関連性

「荒地」は、五つの部分にわかれ、その各々に標題がついている。しかし、詩の展開は、論理的思考や、時の流れによって順序づけられてはいない。詩全体がまるで一連の夢の記述のようであり、話者は、一人称であったり三人称であったりして主観と客観がまざりあい、現実の世界においては超えられない時間と距離の制約も破られている。

夢が人間の深層の心理と関係していることは、精神分析においては、一般に信じられているが、その中で、ユングは、夢の中にもゆがめられた形だが *collective unconscious* があらわれるとしている。「荒地」は、夢とは違い熟考と推敲の結果生れた芸術作品だが、最初は、無意識の詩的インスピレーションによって形づくられたものである。そして、前後の関係の明らかでないような夢にも隠された意味があるように、この夢の記述のような詩にも、ある意図、企画がある筈である。以下、詩の最初から順を追って、その意味を考えてみたい。

### 第一節 死者の埋葬

詩の冒頭に、チャーサーの「カンタベリー物語」の序詞が諷刺的に用いられている。人々は通常、地上に生命をふきかえさせる春を、待ちこがれるものだが、この主人公は、春の到来を

1 Genevieve W. Foster, "The Archetypal Imagery of T. S. Eliot," *PMLA*, LX (June, 1945), 578.

怖れている。

April is the cruellest month, breeding  
Lilacs out of the dead land, mixing  
Memory and desire, stirring  
Dull roots with spring rain.

(p. 63)

西洋において春に復活祭を祝うという習慣を考えてみても、冬に死んだようになっていた植物が春に芽を出すという自然現象と、一度犠牲となって死んだ神が復活する神話とは、密接に結びついている。第I部の標題である“死者の埋葬”は、植物が冬に冬眠している様と、犠牲となった神が一度地中に埋葬されることを、あらわしているといえる。

犠牲者が、復活し、生命をもう一度与えられるためには、大きな苦痛、苦難を経なければならぬが、主人公は、再生への苦しい過程を通ることをよしとしない。彼は、春に目ざめる肉体的な欲望によって心をわずらわされることも、適去の思い出によっても自分の心の平安をみだされたいと思っていない。この思い出というのは、人類に伝えられている神話あるいはユングの *collective unconscious* であるとも考えることも出来る。彼は、冬の死んだような生活を送ることを望んでいる。

Winter kept us warm, covering  
Earth in forgetful snow, feeding  
A little life with dried tubers.

(p. 63)

この態度は、主人公のみのものではなく、統治者が不能であり、土地が不毛な、荒地の住民の典型的な姿である。彼等は、現実から逃避するために愛のない性的快楽にひたっているが、生命を産み出す営みとしての性は無視されていることがこの第一連の春のよろこびの詩の皮肉な引用によって強調されている。荒地の住人は、苦悩なしでは得ることの出来ない精神的な価値には、無関心である。第一連は、次のような一行で終わっている。

I read, much of the night, and go south in the winter.

(p. 63)

夜にたくさん読書をするということは、失われた世代の若者達の多くがそうであったように、不眠症にかかっているということも出来るし、冬に南の国に行くというのは、苦しいことは避けて楽をしたい気持とすることも出来る。いずれにしろ、自然の人間本来の生き方とは逆の生活であることがわかる。

一方、上記の一行は、聖杯伝説や他の神話に多く見られる旅、又は、精神の遍歴という重要

な主題もあらわしている。聖杯伝説においては、探究者は、聖杯を求めて危険の聖堂への旅にたつのであるし、ダンテの「神曲」においては、死者の国を訪れる話、その他、Thomas mann の「魔の山」等、旅を扱った、神話、伝説、文学作品は多い。前に述べたように、その旅は、旅行記であると同時に、主人公の心理的・精神的な道程をあらわしていることが多い。言いかえれば、旅の主題は、一人の人間が、真実というものに対して開眼する経緯を語り、又ある文明が真の精神的な文化にすすんでいくという過程を語っているように思われる。そして個人の場合も、人類全体としても、真に生きるためには、苦しみを経なければならないという点で、この詩の主題と結びついている。

第 I 部の最終連に、現代の都市、ロンドンが描かれている。「神曲」の地獄篇の引用が、荒地の死んだような生活を強調する。そして、この一連の終りにかけて、死者が埋葬されたことが示唆される。

'That corpse you planted last year in your garden,  
'Has it begun to sprout? Will it bloom this year?

(p. 65)

Elizabeth Drew によると、この部分は、ポエニ戦役の戦友同志が、自然現象を司るエジプトの農業神オサイリスについて語っているのであって、オサイリスは、冬の間は、死の力に屈するが、春の雨が訪れる頃復活するというのである。ここで、注目しなければいけないのは、生命を与える要素としての雨、又は、水の役割である。「荒地」という詩全体が水という象徴的媒介物を中心として構成されているといっても過言ではない。犠牲となって一度死した神としてのオサイリスに言及した後、再び、復活に対する怖れが述べられている。

'O keep the Dog far hence, that friend to men,  
'Or with his nails he'll dig it up again.

(p. 65)

これは、詩の展開部における、主人公の春の到来に対する恐怖と呼応している。Eliot は、この詩の中で精神的に荒廃した現代の都会の有様を単に描き出そうとしているだけではなく、未だに人々の罪をあがなって犠牲となる人もあられせず、そこに住む人も、死の中に住んでいるのだが、そこに何か救いのようなものを求めようという意図をもって、この詩を書いているように思われる。

## 第二節 チェス遊び

第二部の“チェス遊び”においては、過去から現在に至る様々な男女の恋愛関係が言及されている。第一スタンザでは、女性の私室が描かれ、アントニオとクレオパトラ、イーニ阿斯と

1 Elizabeth Drew, *op. cit.*, P. 61.

ダイドーの美らぬ恋が示唆されている。又、第二部及び第五部において、テレウスとフィロメラとプロクネの神話がかすかに言及されている。フィロメラがナイティンゲールに生まれかわり、プロクネがつばめになるというこの神話は、この詩の中で重要な役割をはたしている。自分達の苦しみによって生まれかわる彼女達にくらべ、荒地の住民は、テレウスと同じように肉体的な欲望の満足のみを求めている。

The change of Philomel, by the barbarous king  
So rudely forced; yet there the nightingale  
Filled all the desert with inviolable voice  
And still she cried, and still the world pursues,  
'Jug Jug' to dirty ears.

(p. 66)

死によって生まれかわるという主題は、「テムペスト」からの引用によっても導入されている。

Those were pearls that were his eyes. (p. 64, p. 67)

これは、エアリエルが歌う哀歌であり、ナポリの王子フェルディナンドは彼の父が溺死したと思い込む。神話においては、溺死はある種の洗礼、又は、贖罪を意味し、それによって生まれかわったり、復活したりすることを意味する。水と同様、音楽は、象徴として、この詩の主題との関連において重要な役割をはたしている。

第二部の最後のスタンザは、ロンドンの居酒屋での女達の会話の背景に、あたかも、この世の終わりか、死神がやってくるのを告げるかのように店の主人の“HURRY UP PLEASE ITS TIME”という閉店を告げることばが織り込まれている。女達は、友人リルと戦争から帰って来る彼女の夫について話している。リルは、夫アルバートからもらったピルを買うための金で新しい入れ歯を買ったという。このような会話は、荒地の住人の不毛性をよくあらわしている。

第二部の最終行のオフェリアの狂気の別離のせりふは、もう一つの溺死を暗示し、救われるためには、生まれかわることが必要であるという全体のテーマと呼応している。

“チェス遊び”においては、男女の不毛な関係を通じて荒地の不毛性が描かれているのだが、ミドルトンの劇からとられたというこの題名は当を得ているといえる。

### 第Ⅲ節 劫火の説教

第Ⅲ部の“劫火の説教”においては、第Ⅱ部で展開された主題が異った背景をもって提示されている。この部分においても、過去の精神的文化遺産が、荒地の荒廃した姿と対照されている。

But at my back in a cold blast I hear  
The rattle of the bones, and chuckle spread from ear to ear.

(p. 70)

ここでは、原作の Marvel の抒情的な美しさは、失われ、残酷で陰気な死が存在するだけである。

But at my back from time to time I hear  
The sound of horns and motors, which shall bring  
Sweeney to Mrs. Porter in the spring.  
O the moon shone bright on Mrs. Porter  
And on her daughter  
They wash their feet in soda water  
Et O ses voix d'enfants, chantant dans la coupole !

(pp. 70-71)

又、アクテオンをダイアナのもとに、もたらすかわりに警笛やモーターの音が、スウィニーをポーター夫人のところへ彼等の愛のない機械的關係へと運んでくる。そして、彼女とその娘は足を洗うというある種の身を清める儀式を暗示していると思われる行為を行うのだが、ソーダ水で洗うということがそのイメージを、ゆがめている。とはいえ、この部分は、再生への希望をいくらかは示していると考えられる。

同様な希望をあらわしていると考えられるのは、次にあげる数行である。

'This music crept by me upon the waters' ...  
The pleasant whining of a mandoline  
And a clatter and chatter from within  
Where fishmen lounge at noon: where the walls  
Of Magnus Martyr hold  
Inexplicable splendour of Ionian white and gold.

(pp. 72-73)

ここには、他の部分にみられるような、ゆがめられたイメージも、死のおとす暗い影もみあたらない。妙なる音楽や、イオニア式の白と金色の教会は、共に精神的な価値をあらわしていると考えられる。

そして、第Ⅲ部は、東洋と西洋の偉大な聖人、仏陀と聖アウグスチヌスのことばで終わっている。この二人の聖人は、共に世界が欲情で満ちていることを認識して、救われるためには、欲を捨てなければいけないと説いた。荒地の住人は、欲情で身を焦がしており、それは、水によって冷やされなければならない。

#### 第Ⅳ節 水 死

次の部分は、“水死”と題され、ついにあるいけにえが捧げられたということが示唆されている。フェニキア人の水夫フリバスは、溺死するが、彼の死は、第Ⅲ部のスミルナの商人ユーゲニデス氏の溺死と呼応している。「荒地」という詩全体の構想から考えても、溺れて死ぬということは、重要なテーマであり、Eliot が「料亭にて」という詩において、フリバスの溺死を扱っていることから、長い間関心を持っていたように思われる。と同時に、溺死というテーマは、聖杯伝説やその他の神話とならんで、彼の現代の混沌とした世界に秩序を与えるものとして重要な位置を占めている。

#### 第Ⅴ節 雷 の 曰 く

最後の、“雷の曰く”は、この詩の中で、最も批評家の論のわかれる部分である。この詩の終りで、はたして漁夫王の病は治やされ、国土に生命力がもどったかどうかは、この詩は、どちらとも断定していないように思われる。最初の一連では、革命又は、戦乱の状態が記されている。その中で、人々は、救いの雨を待ちのぞんでいる。彼等の耳に、遠くの雷鳴はきこえるのだが、雨はついに降らず、人々は、水の幻影を見るようにさえなる。そして、第Ⅰ部に言及された、十字架にかけられた神は、この部分で、キリストであることがわかる。しかし、荒地の住人は、神の存在を認めようとはせず頹廢した生活を目的もなく続けている。

しかし、とにかく、詩の最後で、危険の聖堂への到達が言及される。

In this decayed hole among the mountains  
 In the faint moonlight, the grass is singing  
 Over the tumbled graves, about the chapel  
 There is the empty chapel, only the wind's home.  
 It has no windows, and the door swings,  
 Dry bones can harm no one.  
 Only a cock stood on the rooftree  
 Co co rico co co rico  
 In a flash of lightning. Then a damp gust  
 Bringing rain

(p. 78)

ここで、死又は、犠牲が述べられ、雨が降るであろうという希望が引用の最後の二行に述べられている。そのあとで、雷が、人々に三つの命令を与える。「与えよ、共感せよ、自制せよ」と。このように、最後の一連は、詩全体のまとめの役をもはたしているのだが、ここにおいても、漁夫王は、本当に春が来るのかどうか疑問を抱き続けている。

I sat upon the shore  
 Fishing, with the arid plain behind me

(104)



Shall I at least set my lands in order ?

(p. 79)

最後のスタンザにおいても、決定的な再生の徴候は見えないが、何らかの進展は見られるように思われる。最終行の「平安 平安 平安」は、“劫火の説教”の、「燃える 燃える 燃える」よりも、未来への望みをあらわしているようである。

## 結 語

以上、第一章においては、神話の持つ意味と、「荒地」とを、関連づけ、第二章においては、各部分にわたって一つの解釈を試みた。

「荒地」は、危険の聖堂への到達が達成された時に終り、それ以上の説明は、なされていない。そして、最初の部分に展開された苦しみを経て新しい生をうけることへの恐怖は、詩の最後において完全に解決されたとはいえない。これは、丁度、T. S. Eliot が現代の世界を見た時に抱く考えと一致するのではなからうか。

## 参 考 文 献

Text:

Eliot, T. S. *Collected Poems 1909-1962* (London, 1963)

References:

De Ford, Sara, *Lectures on Modern American Poetry* (Tokyo, 1957)

Drew, Elizabeth, *T. S. Eliot: The Design of His Poetry* (New York, 1949)

Foster, Genevieve W. "The Archetypal Imagery of T. S. Eliot," *PMLA*, LX (1945)

深瀬基寛他訳「ジョイス、ウルフ、エリオット」築摩書房 世界文学大系 57, 1960年

Jung, C. G. *Psyche and Symbol: A Selection from the Writings of C. G. Jung*  
ed. Violet S. de Laszlo (New York, 1958)

Williamson, George, *A Reader's Guide to T. S. Eliot: A Poem-By-Poem Analysis*  
(London, 1955)